光の使徒

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の使徒

【Ｎコード】
Ｎ８６５１Ｗ

【作者名】
ｔａｋｏｓａｓｈｉ

【あらすじ】
シンと和解した長部は、強大で凶悪な女、「ミウ」の存在を知らされる。ミウの力の片鱗を見せつけられ、長部は一度は無力感に襲われる。しかし、運命はどこまでも追いかけてきた。最愛の娘、香津美が姿を消したのだ…

プロローグ

「犯罪カウンセラー」の看板を掲げ、事務所を構えている長部満（おさべみつる）は、これは簡単な依頼だろうと、最初のうちは考えていた。

事務所にやって来たのは、服装は地味めだがどぎついマニキュアが目立つ、５０代半ばと思われる女性。

長部はもと刑事だった。しかし、あまりに人間の狂気と暗黒に関わり過ぎたせいか、１０年前に精神に異常をきたした。警察を退職し、治療を続けながら、ストーカー対策や、ドメスティック・バイオレンスの被害などの相談に乗る仕事を始めた。しかしこの悪趣味なマニキュアの女性が依頼してきたのは、それまでのものとはまったく違っていた。

「光の使徒」

初めて聞く名だったが、その新興宗教に息子が入れあげてしまい、なんとか脱会させたい、という。

「ロクでもないものに決まっています。もし犯罪に手を染めるようなことがあったら…」

長部は内心、苦笑いしていた。ご心配なさらずとも息子さんは帰ってきますよ、と口について出そうになってしまったが、こういうパターンは見慣れている。どのくらい入れ揚げているのかわからないが、骨の髄までしゃぶり尽くされて、ポイと捨てられるのは間違いない。もっともこの女性…大橋富江（おおはしとみえ）はそうなる前に息子を脱会させたいらしいのだが。

かつてのオウム真理教のようなイメージが、頭にこびりついているのだろう。犯罪に手を染めるより、金が続かなくなるほうが先であるのは明らかだった。

「息子は、小さいころから夢見がちな子でしたから、言葉巧みに

騙されたのですわ」
「ええと…息子さん…高道（たかみち）さんは、まだ独身、ということで？」
「ええ、あの子は、人づきあいが苦手ですので…」
すべての男は潜在的にマザコンである、という説というか理論は聞いたことがあった。しかし、いわゆる一般社会でいうマザコンは、母親のほうに問題があることが多い。息子はその思考や行動で、母親の支配から逃げたがっているものだ。これも、おそらくその類のものだろう。
男はいつか自由を求めて母親から巣立っていく。それがネガティブなものかポジティブなものかは別としても、それはごく自然なことだ。
しかし長部もまた家庭を持つ身である。子供が新興宗教にはまっている、というのは確かに心穏やかではないだろう、ということはわかった。
「高道さんは、いま、お家にいらっしゃるのですか」
「いいえ…1カ月ほど前、家を出てしまって」
「高道さんのお年は？」
「35歳です」
長部はその35歳の息子に、内心、同情した。
「お仕事も辞められたのですか？」
「いえ…そうではないようです。一度、息子の職場へ行ったことがあるのですが、会わせてもらえませんでした」
「それは…どうして？」
「本人が…あの子が…私に…会いたくないと…」
大橋富江は涙をこぼした。
長部は困惑していた。こいつは少々厄介かもしれない…
「大橋さん、憲法には宗教の自由というものがあります」
「知っております」
「御子息はすでに成人しておられる。よって、強制的に脱会させることは、できません」

「でも、あの子は、私がついていなくては…」
長部は営業スマイルを浮かべて、
「その『光の使徒』という団体が、何らかの法に触れる不正を行なっているとわかれば、トップは逮捕され、団体は自然消滅となります。そうすれば、御子息はあなたの元へ帰ってくるでしょう」
「そ、そうですか！」
「『光の使徒』の、パンフレットとか、冊子など、そういったものはありませんか？」
「持ってきております」
富江はハンドバッグから、チラシのようなものを出した。

光より生まれ…光へとかえっていく…

というキャッチコピーに、でかでかと、若い長髪の男の写真が載っていた。
（これは…）
長部は写真の男に、何かしら背筋の寒くなるようなものを感じた。
端正な顔立ち、と言えばそれまでだが、何か、眼を合わせることさえ危険なような気がした。
刑事時代、悪党の顔ならうんざりするほど見てきたが、これはそうではない。
その男の名前は桐沢新（きりさわしん）というらしい。
（『光の使徒』の教祖か…）
まあ、おそらくこの不思議な雰囲気が、魅力的に感じられることもあるのだろう。
長部は『光の使徒』の本部がある住所を調べた。わりあいと近くだった。

大橋富江に名刺を渡し、調査料などの細かい相談を済ませた。
彼女は、くれぐれもよろしくお願いします、といって、帰ってい

った。
あとの予定がなかったので、事務所の戸締りをして、帰宅した。
中学2年生の娘、香津美が一人でテレビを見ていた。
「ただいま」
「あ、おかえり」
香津美はそう言うと、テレビに視線を戻した。
長部はスーツを脱ぎながら、今回の依頼について考えていた。
（やはり金で取引するしかないか）
長部としては、ひとつの宗教団体を自分一人で壊滅させるなど、出来る訳がないことはわかっていた。
それよりも、問題となっている大橋高道くんを捕まえて、説得した方がいいのは分かりきっている。
容易に解決しないようであれば、教団側に金を渡して、脱会させてしまう。せいぜいそんな手しか思い浮かばなかった。事を荒立てるのはまずい。別に長部自身の財布が痛むわけではない。あの母親だって、それで納得するだろう…
「あー、お父さん、殺人事件だって！」
娘の声に、長部は思わずテレビ画面を覗きこんでいた。
「遺体で見つかったのは、大橋高道さん、３５歳で、警察では殺人と自殺の両面から…」
なんだって?！
長部は刑事としてのカンが働くのがわかった。どこかで、なにやらとんでもない事が起こっている…

第一章　導師シン　（1）

「光の使徒」は信者数２００名ほどの、ごく小さな団体だった。
宗教法人として認定されてもおらず、死んだ大橋高道（おおはしたかみち）がそれに入信していたということも、報じられることはなかった。
大橋は、山奥の切り立った崖から転落死しており、飛び降り自殺か、何者かに突き落とされたか、まだ警察は判断できていなかった。
どちらにしても、「脱会させる」という契約は反故になったわけだ。「これも何かの縁」で済めばいいのだが。
翌日、事務所へ行くと、案の定、電話がけたたましく鳴った。
「長部相談所ですが…」
（高道が…高道が、死んだんです！）
甲高い声。名乗らなくても、昨日の大橋の母親であるとわかった。
「お気の毒です」
（きっとあの連中に殺されたんだわ！）
「それは、まだわかりませんよ」
（あの桐沢とかいう男を捕まえてください！）
桐沢新（きりさわしん）…「光の使徒」の教祖。
長部は、耳元で喚いている大橋に適当に受け答えしながら、「光の使徒」のパンフレットを取り出した。
一度見たら忘れられない顔に違いない。
大橋高道はなぜ、入信したのか？
どこで「光の使徒」と出会ったのか？
（…いいですか！　絶対に、絶対にあの連中を…）
長部は電話を切り、別の番号をプッシュした。
（お電話ありがとうございます。光の使徒でございます）
ハキハキとした、若い女の声。

「お聞きしたいことがあるのですが」
（はい、なんでしょう？　お悩み事ですか？）
「大橋高道という人が、そちらに入信していませんでしたか」
（…さあ？　存じませんが）女の声が突然険悪になった。少々まずい。
「彼は志半ばにして亡くなったのです」
（はあ）
「私は彼の友人で…」この辺のとっさの機転は、刑事時代にずいぶん鍛えられた。
（失礼ですが何の御用でしょう？）
女はきつい口調で言った。なるほど、タチが悪そうだ。
「無料セミナーに参加したいのですが」
すると、また女の口調はガラリと変わり、
（はい。今週の予約は締め切られましたので、来週はいかがでしょう？）
「結構です」
（それでは、お名前とお電話番号を…）
長部は偽名を使った。
（光の恵みが、ありますように）
女はそう言うと、電話を切った。

別に、関わる必要はなかった。
自分には関係ない話として、片付けてしまうのは簡単だった。
自分に行動を起こさせたものは何か、というなら、やはりあのパンフレットにほかならなかった。
それは、大橋の死と「光の使徒」が結びついているということとは、別物だった。
自分は確かに「光の使徒」と、あの桐沢新という男に興味を持ったのだ。

救いを求めているのだろうか、と自問自答してみる。
だとすれば、いったい何からだろう？　自分から仕事と妻を奪った、この病気からか？
確かに、それはあるかもしれない。
しかし、その一方で、犯罪の匂いがするところを素通りできないという、元刑事としての使命感も、確かにあったのである。桐沢新は得体の知れないところがあるが、明らかに娑婆を歩かせておいてはならない人間だと、刑事のカンが告げていた。

長部は、とうぶん事務所を閉めることにした。
帰宅途中、富江に電話をかけた。

（刑事さん！）
「刑事ではありませんよ」
（なんでもいいですわ、奴らは、高道を殺したんですよ！）
「これから、そちらへお伺いしてもよろしいでしょうか？」
（はい…？）
富江は呆気に取られているようだった。
「高道さんのことで、お訊きしたいことがありましてね」
（ええ！　なんでも、お答えしますよ！）
例のセミナーまではまだ１０日ほどあった。その間にやれることは、やっておかねばならない。

「高道さんが、なぜ光の使徒に入信したのか、おわかりになりますか」
「それが…どうも、女にたぶらかされたようなんです」
長部は、大橋家の客間に通されていた。家具や置物や、掛かっている絵など、高級そうなものばかりだった。
「ほう、女性が？」
「だから、女が大勢いる職場など、私は反対したのですわ」

長部はあらためて、３５歳で散った青年に同情した。母親以外の女に対する接し方など、まるで知らずに大人になったのに違いない。それに、この母親からは、息子が死んだというのに、せいぜい最高級のツボが壊れた、という程度の気持ちしか伝わってこない。

まあ、家族のことに関してはおれも人のことは言えない、と長部は心の中でつぶやいた。

（職場で知り合った女…つまり、駆け落ちみたいなもんかな）

と、長部は頭の中でメモをとる。闘病中に覚えた特技だ。

「高道さんのお勤め先をお訊きしたいのですが」

「主人が経営している会社の孫請けですが…縫製工場です。主人ときたら、下っ端から修行してこい、なんてあの子に言うものだから…」

そういう社員が会社内でどういう扱いを受けるか、だいたい見当はつく。

本人がどういう風に振舞っていたか、も、である。

長部はその工場の所在地を聞くと、大橋家を後にした。

第一章　導師シン　（2）

長部は、大橋高道が生前勤めていた、フェニックス（株）の前でタクシーを降りた。
来訪することは前もって伝えてあった。長部は休憩所に通され、大橋の上司だったという、加藤という男がやって来た。
名刺交換など、挨拶を済ませると、加藤はこちらの用向きを察していたように、
「大橋ねえ…まあ、今どきの若いもん、てとこだったかな。死人の悪口はあまり言いたくないけど」
「と、言いますと？」
「何ていうか、上昇志向がないんだね。褒めれば手を抜くし、叱ればビビるだけだし」
「ふーん…」
「仕事に関してはそんなもんかな」
「なにか異性関係で問題のあったことは？」
加藤の顔がわずかに曇った。
「変な女と付き合ってるっていう噂があったよ。いや、あくまで噂だよ」
「変な女、というのは？」
「ちょっとスピリチュアルに凝ってる、妙な女だって話だった。俺は見たことないけどね」

フェニックスを後にして、長部は、まだ何かするべき事はないか、考えていた。
「光の使徒」の信者か、元信者と、話ができたらいいのだが…
わずかな希望を持ち、「光の使徒」の本部の近くへやって来た。
どうやらアパートを丸ごと借りて、住居と集会場を兼ねているようだった。例のパンフレットを拡大したようなポスターが、何枚も

貼ってあった。
人の気配はなく、静かだった。
さすがに、いきなり押しかける気にはなれなかった。なんといっても、ひとりの人間の死に関わっているかもしれないのだ。
長部は、ポスターの桐沢新の顔を見つめた。見る者を怯えさせるような、何かを秘めた顔だった。いわゆるコワモテや、粗暴な顔つきではない。写真なら正視できるが、いまから１０日後に、本人を眼のあたりにしたら…

そして…その日がやって来た。長部は、かつて通りかかった「光の使徒」の本部へと行った。
２０人ほどの人が集まっていたが、なぜか男ばかりだった。
ここにいるのはみんな、長部と同じように無料セミナーに申し込んだ者のはずで…女が混じっていても、不思議はないはずだった。野郎ばかり２０人も集めて、何をしようというのだろう。
ただ、年齢については、１０代と思われる少年から、頭の禿げあがったオヤジまで、様々だった。
（違法ポルノでも売りつけるつもりなのかな）
長部は、そのような場合に備え、いくらか現金を用意してきていた。一人だけ「買わない」などと言い張っては、顔を覚えられる恐れがある。もちろん、桐沢新を捕まえるまでの経費は、すべて大橋のヒステリック婆さんが持ってくれる。
２０人ほどの群集は、しばらく手持ち無沙汰にしていた。中には、見ず知らず同士、談笑を始める者たちもいた。

するとそこへ、高級そうな黒い車が、止まった。全員がそちらを見た。
助手席のドアが開き…アラブ人のような服を来た、長髪の男が降り立った。
桐沢新に間違いなかった。かなり大柄でたくましい体つきをして

いた。何となく、以前殺されたという、オサマ・ビンラディンを思いおこさせた。
ただ、長部はどこかに違和感を感じていた。
「皆さんようこそ」
桐沢新が両手を振った。集まっていたものは一斉に拍手し、歓声をあげた。
長部はなるべく目立たないよう、群集の中に紛れ込みながら、彼を観察した。
どうも変だ。
顔かたちは、紛れも無くあの写真と一致しているが、雰囲気が違う。見つめるだけで人を骨抜きにしてしまうような何かが、写真からは感じられたが、実物にはそれがなかった。どこかのちょっとハンサムで草食系の兄ちゃん、という感じだった。
長部は、似ているが別人だと確信した。
本物はどこにいる？

やがて群集は、アパートの部屋の一つへと入っていった。
「じゃあ皆さん、今日は４時までです。ごゆっくり」
導師シンと呼ばれた桐沢は、部屋の隅に座った。
すると…
「うおおおっ！」
中の一人が、突然、導師シンに向かって突進した。
「危ない！」
導師シンは、すっと左手を上げ、手のひらを突進してきた男に向けた。
（あっ！）
長部はそのとき、導師シンから、心臓をわしづかみにするような、威圧感を感じた。
（そうだ、これだ！）
これこそは、あの写真から感じた、桐沢新の本当の迫力だった。

導師シンに手のひらを向けられた男は、雷撃を浴びたように崩れ落ちた。手にはナイフが握られていた。
（殺そうとしたのか…？　それにしても、今のは何だ？）
男は動かない。死んでいるのは明らかだ。
導師シンは、常連とおぼしき連中に目配せした。
死体は外へ運び出されていった。
長部は逃げ出したい衝動を必死でこらえた。冗談じゃない！　人が殺されるところを見てしまったのだ。しかも、手をかざしただけのようにしか見えなかった。
（関わり合いになるのはごめんだ。あの婆さんとも、これきりにしよう）
「あの…導師シン」長部は平静を取り繕って言った。
「なんだね？」
「急用を思い出しまして」
「もう帰るのかね？」
「は、はい。申し訳ありません」
当初の意気込みはまったくしぼんでしまっていた。元刑事のプライドも何もなかった。
命あっての物種である。
長部はアパートを出ると、小走りに近い歩き方で、自宅へと向かった。

第一章　導師シン　（3）

長部と、富江の二人は、事務所で口論していた。
「それで、何もしないで逃げてきたってわけ?!　あんた、元刑事だろう?　人殺しなんて見慣れてるだろうが!」
「相手が人間ならね!　人間は、手をかざしただけで人は殺せない。あいつは人の皮をかぶった化け物だよ!」
「超能力だとか、そんなものを信じるのかね?　小型のスタンガンでも当てたに決まってるよ」
「とにかく、私はこれ以上、首を突っ込みたくないんだ。ここに、『光の使徒』に関する資料がある。ただで差し上げよう。それと、今までの経費も全部返す。あんたとも、もうこれっきりだ」
富江は、アイシャドウを塗りたくった眼で、長部をにらみつけていたが、
「ふん、腰抜け野郎め」
捨てせりふを残して、事務所から出ていった。
（なにを言われたって、耳に心地よく響くもんだ。もう、血なまぐさいのは真っ平だ）
事務所を閉める準備を始めると、電話が鳴った。
「はい、長部相談所で…」
（やあ刑事さん）
耳に覚えがある…ありすぎる声だった。
導師シン…!
（ぼくのせっかくのパーティから逃げ出すとは悲しいな）
「な…なにが目的だ」
（いま、お嬢さんと一緒に、ご自宅にお邪魔してるんだよ）
香津美…!
「た、頼む。娘だけは何もしないでくれ。なんでも、あんたの言うとおりにする。だから香津美だけは…」

（あなたはぼくを誤解しているようだ。モンスターではないよ。ただちょっと普通の人にはない特技があるだけだ）
「香津美の声を聞かせてくれないか」
（もちろんだ。香津美ちゃん、お父さんが話したいそうだ）
やがて、香津美が電話に出た。
（やっほー、お父さん）
怯えている様子はない。
「香津美、すぐに１１０番しろ。そいつは人殺しだ」
（えー？！　ウソだよお、そんなの）
「どうして家に入れたりしたんだ！」
（あたし、ケガしてるところを、シンさんに助けてもらったんだよ）
「なに…」
そこで、またシンが話し出した。
（あなたに協力していただきたいことがある）
拒むことのできる立場ではなかった。
（とりあえず、お嬢さんと一緒に待っているから、帰ってきてくれないか）
「わかった」
（もちろん謝礼はする。あなたは心の病を抱えているそうだね。ぼくが治してあげよう）
「その前に…あんたが信用できるやつかどうか、確かめたい」
（ほう？）
「とんでもないことが多すぎて、まるでＳＦ映画だ。信用しろというほうが、無理というものだ」
（まあ、とにかく、早く帰ってきたまえ。３人で食事でもしながら話そう）
長部が帰宅すると、楽しそうにテレビを見ながら談笑している、シンと香津美がいた。

シンはジーンズに長袖シャツというラフな服装に着替えており、こうして見ると、ごく普通の若者に見えた。
「やあ。早かったね」
「おかえりー！」
「辛気臭い顔をしていないで、こっちへ来いよ」
長部は、二人の向かいに腰を下ろした。
「聞きたいことがいろいろある」
「なんでも聞いてくれ。テレビは消そう」
シンはリモコンでテレビを消した。香津美は不満そうだった。
「あんたは…何者だ？」
「抽象的すぎるな。まあ、いうなれば、ただの人間さ」
「あの特殊能力…あれは一体なんだ？　ただの人間に、あんなことができるか？」
「ああそうか」
シンはパチンと両手を合わせると、
「あなたはあれを見たので、急に帰るなどと言い出したのか。まあ無理もないが」
「人を殺して、なんとも思わないのか」
「正当防衛さ。あのままなら、ぼくが殺されていた」
確かに、そうに違いなかった。
「なにか、身に覚えがあるのか？」
「と言うと？」
「殺されそうになったことについてだ」
「そう…そこが、ぼくらが協力すべきところなんだ」
「どういうことだ？」
「昼間の男は、別の導師の命令で、ぼくを殺そうとしたのさ。導師ミウといってね、ぼくの妹だよ」
「我々『光の使徒』は、きまった家を持たないのが普通だ。例外はあるが、いろいろな人たちと関わりを持ち、家を渡り歩く。だが、

いつもそれができるとは限らない。そのために、あのようなアパートがあちこちにあるわけさ。信者が寝泊りできるようにね」
「バラバラに行動しているのか？」
「光こそが、われわれの家であるという教義からきている」
「じゃあ、その、導師ミウを探すには？」
「それは、あなたの情報収集にかかっている。ぼくは妹に会わなければならない」
「会って、どうする？」
「殺さなければならないだろうな。生かしておいては、何をやらかすか分からない」
「妹を殺せるのか？」
「さあ、わからないよ。案外、返り討ちにされるかもしれない。それほど危険な女だ」
「とりあえず何から始めることにするかね」
「ミウの写真を渡しておく。今日は、もう休むことにしよう」
シンはそう言って、長部に写真を渡した。
香津美の友達と言ってもいいくらいの年齢に見えた。確かにシンの面影がある。髪はショートカットで、眼はぱっちりとしていて…
「おい、長部さん、しっかりしろ」
シンが長部の肩を叩いて、我にかえった。まるで写真の中に吸い込まれるように見入っていたことに気がついた。
「わかっただろ？　写真でさえ、これだけの力がある。眼を合わせたりなどしたら、あっという間に魂を奪われてしまう。普通の人間では近づくことも危険な相手だ」
気がつくと全身に冷や汗をかいていた。長部は、人間の理解を超えた力の存在を、認めざるを得なかった。

第一章　導師ミウ　（1）

その夜は、シンは長部と同じ部屋で寝た。シンは言ってみれば勝手に押しかけて来たわけだが、「出ていってくれ」とは言えなかった。

そして…長部は深夜に眼を覚ました。

部屋の中を満たす、眩しい光。

（これは…いったい？）

そして、光の中に人影があった。

（まさか…）

懐かしく、暖かい感覚。

「あなた…」

「か、香奈…」

かつての妻が、微笑みかけていた。

「なぜ？　だってお前は…」

「ずうっと、あなたと一緒よ…」

「香奈…」

「あの光の中に、わたしたちの本当の家があるのよ」

「い、いや…これは夢だ。夢に違いない。香奈が生き返るなんて…」

光の中の香奈が、歩み寄り、手を差し伸べた。

さあ…行きましょう。

長部は、おそるおそる、香奈の手に触れようとした。

「やめろ！　ミウ！」

シンの声だった。長部は呆然と立ち尽くしていた。

バチッ！　という火花が飛ぶような音がして、光は消えた。

「か、香奈。…香奈は？」

「しっかりしろ、長部さん」

（こんちきしょうめ、あと少しというところで…）
頭の中に、悪意に満ちた甲高い声が響きわたった。
シンはそれに答えて、
「お前の思い通りにはさせんぞ！」
（シン、なぜそんな人間の味方をするの？）
「お前こそ、とうとうあいつに魂まで売り渡したか！」
（わたしは、だれの指図もうけないわ）
「立ち去れ！　いまは戦うときではない。お前も、まだ充分には力を操れまい」
（うふふ…そうかしらね）
そして、悪意に満ちた気配は消えた。

長部とシンは、向かいあって台所のテーブルに腰掛けていた。
「見たかい？　あれが導師ミウさ」
「…」
「とても強力だ。あの幻影は、亡くなった奥さんか？」
「そ、そうだ…」
「あのまま幻影の手を取っていたら、あんたはミウの奴隷にされていた」
長部は大粒の涙をこぼした。
「香奈…」
シンはため息をついた。
「ミウめ、残酷なことをする」
「奴隷でもいい…香奈と…香津美と…」
「どうした？　長部さん」
「あんたが…あんたが、現れたおかげで…」
「…」
「私は強大な力も、カネもいらない。家族3人の、ささやかな幸

せで充分なんだ。それを…」
「長部さん…」
「私は君の力になどなれない。つまらないただの中年男だよ。巻き込まないでくれ」
「…」
「夜が明けたら、出ていってくれ。そして、もう私の前に姿を見せないで欲しいんだ。すまない…」
「そうか…」
「君が人を殺したことは誰にも言わない。必要なものがあれば、金でも、なんでも持っていくといい。だが、もうこれっきりだ」
「わかった。しかし、今後、もしぼくの力が必要になったら、これを使ってくれ」
シンは、テーブルの上にちいさな石を置いた。なにかの結晶のようだった。
「それじゃ…」
シンの姿がぼやけ始め、溶けるように消えた。

（悪い夢だった…）
長部は、テーブルの上の小さな石を見つめた。きれいな石だった。
（香津美は、眼を覚まさなかったのかな？）
長部は、香津美の部屋を、そっとのぞき込んだ。

香津美の姿はなかった。

第一章　導師ミウ　（2）

（香津美がいない？！）
長部は半狂乱になった。
玄関の鍵はもちろん掛かっていた。

（まさか、あのミウとかいうやつが…？）
連れ去ったのだろうか、と考えて、そんなことができるのか、と疑問を感じた。
いや、あのシンといい、やつらには常識は通用しない。
たった今、この眼で見たばかりではないか。
超能力者…口にすることさえ、長部には滑稽だと思われたのだが。
まさか…本当にいるなんて。
警察へ連絡…いや、ダメだ。
やはり、またシンと会うほかはない。

長部は台所のテーブルの上に置いてあった石を、手に取ろうとした。
すると、石は淡い輝きを放ち始めた。
「ああ…」
そして石はぐるぐると回転し、光の渦を作った。
「驚いたな。こんなに早く再会できるとは」
光の渦の中から、シンが現れた。

「香津美ちゃんがいない、だって？」
「そうなんだ。親に隠れて夜遊びなど、する子ではない。どうしたらいい？」
「そうだな、おそらくはミウが関わっている。死んではいないはずだ」

「頼む。助けてくれ」
「わかった。しかし…」
「しかし…？」
「もう、後には引けぬ。それはわかっているか？」
「…わかっている。もう、逃げたりはしない」
長部は、運命に立ち向かう決意をした。
「わたしに、何ができるだろうか」
シンは、長部に石を渡した。
「これは、『夢見の石』という。大師ウバメ様がお創りになったものだ」
大師ウバメ…シンのような者をさらに超える存在がいるというのか。
「大師様は、すでにこの世の人ではないが、その御力は、この石の中に封じ込められている」
「…」
「あなた次第で、その御力を借りることができる。肌身離さず、持っていることだ」
「わかった」
「では急ごう。車はあるか？」
「ある」
「よし、ミウをそれで追いかけよう。ぼくの力を使っては、感づかれるおそれがある」
「追いかける…と言ったって…どこへ？」
長部はうろたえた。
「その石を使え。それは、あなたの力を引き出すものでもある」
長部は、石を握り締め、香津美のことを一心に想った。
幼くして、母親を亡くした子だった。
そして父親は、刑事という仕事。放ったらかしだったこともあった。
グレてもおかしくはなかった。

それなのに、母親に代わって家事をこなし、むしろ長部の救いになっていた。

待っていろ。　父さんが必ず助けてやる。

眼を開けると…そこは海岸だった。

（はっ！）

長部は、辺りを見渡した。はるか向こうに、人影が見えた。

そして次の瞬間、ビジョンは消え、元の自宅の台所にいた。

「何かわかったか？」シンが傍らに立っていた。

「海…海が見えた」

「なるほど…海か。それほど遠くでもあるまい」

「だが、見たこともない場所だった」

「ぼくに、心当たりがある。さっそく向かおう」

シンと長部は、車に乗り込んだ。

「まずは、『仲間』に会えということか」

シンが言った。

長部はエンジンをかけると、

「仲間だって…？」

「車の中で話そう。国道へ出てくれ」

長部はアクセルを踏み込んだ。

第二章　ウバメの里（1）

国道を4時間ほど走り、シンと長部は車の中で仮眠をとった。
「一体どこへ行こうというんだ？」
目を覚ました長部は尋ねた。
「ウバメの里…小さな村だよ。『光の使徒』発祥の地で、ぼくの生まれ故郷でもある」
「そ、そこに、香津美がいるのか？」
「まあ慌てるな。ミウのような者に連れ去られたというのであれば、慎重にならなければ」
「さっき君は、『仲間』といったが…」
「そう、協力してくれる仲間がそこにいるはずだ」
長部は、ふと思い出したことがあった。
「ミウは君の妹だといったな？」
「ああ、そうだ」
「ならば、そこはミウにとっても生まれ故郷だろう。近づいては危険ではないのか」
「大丈夫。邪悪な魂は近づくことはできない。ミウは完全に、あいつの下僕となってしまった」
「あいつ…？」
「心配するな。すでにこの世にはいない。ミウは何らかの形で、あいつの力を受け継いだのだろう」
「何者だ、そいつは…？」
「ぼくたちの父親だ。名前はウバイ。一時は、名を口にすることさえはばかられた」
「そんなに、悪いやつだったのか」
「ミウと同じように、力の誘惑に勝てなかった。まあ、そういうことだ」

国道から外れ、山道を1時間ほど走った。すると、木立の向こうに、美しい海が開けていた。
「日本に、こんな場所があったとは」
「ぼくが教えなければ、誰も着けない。巧みに隠されているのでね。そのかわり、自販機もコンビニもないぞ」
シンは軽く笑った。
「着いたようだ」
砂浜の傍らに、車を止めた。
（そうだ、この場所が見えたんだ…）
長部はポケットに入った石を握り締めた。
日本の海だということを忘れるほど、その砂浜は美しかった。まるでタイムスリップしたような違和感さえ感じた。
「シン！」
遠くから呼ぶ声がした。
若い女が、こちらへ走ってくる。年は２０歳ほどだろうか。背が高く、スタイルもいい。普通の女のように化粧をして、着飾れば、モデルだと言っても誰も疑うまい。
「やあ、キリン、元気だったか？」
「何かあったの？　あなたが自動車で…それも、よそ者を連れてくるなんて」
「ミウが動き出した。この人の娘をさらって、所在はわからないがあちこちで悪事を重ねているだろう。なんとしても会って、亡きものにしてしまわなければならない。そうだ…長部さん」
長部がキリンに挨拶をしようとすると、シンが声をかけた。
「今ここで、あなたに、ここの住民になってほしい」
「えっ？」
「そうすれば、このキリンという女も愛想良くしてくれるし、みんなが力を貸してくれる。いまさら以前の生活に未練もあるまい？」
言われてみれば、そのとおりだった。
（すべて片付いたら、香津美とここで暮らすのも悪くないな）

「私でよければ」長部は言った。
「よし、あなたに新しい名前を与えよう。イサだ。どうだい？」
「よろしくね、イサ」
キリンがイサの肩をぽんと叩いた。

第二章　ウバメの里　（2）

イサ（長部）は、砂浜に近い小屋に通された。
キリンも一緒に着いてきた。
小屋の中には、木の椅子が１０脚ほど置いてあり、イサとキリンが隣り合って座った。
シンは、正面の、教壇のようなところに立った。
「イサ、ウバメの里へようこそ。まずはキリンにわかるように、いま、外界でなにが起こっているか伝えよう。キリンはこの里で生まれ育ったが、導師としての修練が終われば、外界へ行くことが認められ、光の使徒として、務めを果たさねばならない」
「はい」キリンが返事をした。
「キリンよ、そこにいるイサの娘を、ミウが外界において連れ去ったのだ」
「なんのために？」
「詳しくはわからないが、邪悪なる技を仕込み、手下とするためかもしれない」
シンは説明を続けた。
「イサは初め、我らのことを外界で調べていた。私が彼に興味を持ち、外界でミウを倒すための協力を依頼したが、はからずも、それがあの恐ろしい女を呼び寄せることとなった。したがって、今回のことには私にも責任がある。それで、特例としてここへ連れてきたのだ」
イサは急に立ち上がると、
「シン、君や、ミウが持っている…パワーというべきか、異能というべきか、その力の正体はなんだ？」
「正体…というと？」
「私は、君が手をかざしただけで人を殺したのを見た。ああいった力はどこから来ているのだ？　訓練で身につくものなのか？」

「一言で言えば、それぞれの心からうまれる力と言える。訓練で強化することも可能だ。しかし、誰かに教わって身につくものではない。事実、君は夢見の石を使って、私を呼び出したではないか」
「それが、私の力か」
「焦ることはないぞ、イサ。そこにいるキリンも、まだ真の力に目覚めてはいない」
「私たちだけで、ミウを倒せるだろうか」
すると、シンは微笑みを浮かべ、
「確かに、我ら3人でも、ミウには敵わないかもしれない。しかし、力だけが勝敗を決める要因ではないよ」
「そうよ、イサ」キリンが言った。
「まずは敵を知ることだ。それでは、今度はイサにわかるように、この里について話そう」

そして、シンは語り始めた…

大師ウバメ様は、お若きころ、光り輝くように美しかった、と言われる。
「光の始祖」とも称されるが、これは後の世に神格化されたものだ。
捨てられた病人や、老人が集まって絶望のうちに暮らしていたこの村に、いずこともなく現れ、その光の力で、清らかで美しい村へと変えた、と言われる。
そして、その力のいくらかを、選ばれた村人に与え、外へと出ていき、外界の人々にも光の恵みを与えるよう仰せられた。その者たちは導師と呼ばれた。
その導師の中でも、特に優れた者はウバイという称号を与えられた。
それは代々受け継がれ、私の父はその天才ぶりを認められ、ウバイと呼ばれるようになった一人だった。

それが、我らが直面している敵だ。私とミウは双子の兄弟だったが…

イサが訊いた。

「なぜ、あなたの父は悪の道へ…？」

シンはそれに答えて、

「正体はわからぬが、邪悪な女の誘惑に逆らえなかったのだ。つまり私の母さ」

「…」

「つまり私にも、ミウと同じ血が流れている。そのことは分かっていてほしい。幸いにして、母の血を濃く受け継がずに済んだようだがね。そのぶん、脆弱ではあるが…」

「その、母の名は？」

「思い出せぬ。もし思い出せば…私もミウのようになるかもしれん」

「…」

「さて、今日はこれまでとしよう。キリン、イサに村の中を案内してやってくれ」

シンは、小屋から出ていった。

第二章　ウバメの里　（3）

ウバメの里の中をキリンに案内してもらっているうちに、イサ（長部）はますます不思議な思いにとらわれた。

電気も、水道も、ガスも、電話も、テレビも…ありとあらゆる「文明の産物」がない。

まるで縄文時代である。日本のどこか推測してみたが、見当もつかない。

集団でキャンプ生活をしているようなものだ。もしかしたら、移住を繰り返しているのかもしれない。

だが人々はみな心穏やかで、イサが忘れかけていた静けさと、平和があった。

「いくつか聞きたい」イサが言った。

「いいよ、なんでも訊いて」

「病気やケガをしたら、どうするんだ？」

「導師さまが治してくれるよ」

「警察は…例えば、争い事が起こったら？」

「ケイサツってなに？　争い事なんて、ないよ」

「通貨は？」

「何、それ？」

イサはポケットに入っていた財布を取り出して、紙幣やコインをキリンに見せた。しかし彼女は、首をかしげるばかりだった。

（秘境…というより、まるで異次元世界だな）

「その…近親相姦の問題は？　この里の中だけで婚姻しているのか？」

「コンインって？」

「つまり子供を作ることさ。血が濃くなりすぎると、様々な弊害が出る」

「ああ、聞いたことあるよ」

「例えば、君の両親だが…」
「あたしの父さんは外界から来たんだよ」
（なるほど…シンのような導師は、里に違う血をもたらす役目も果たしているわけか）
「郵便は届くかい？」
「よくわからない…」
なるほど、こんな環境で育てば、超能力のひとつも身についてもおかしくはない。
「じゃあね、大師さまにお目通りを願って、今日のところは終わりにしようね！」

「大師キクミさま！」
「はい」意外にも、若い女の声が奥のほうから聞こえた。
「新しき光の使徒です。連れて参りました」
「お入り」
イサが中に入ると…
「うわっ！」
すさまじい轟音とともに、エネルギーの放射を感じた。
しかし、それは一瞬のこと。

小屋の中には、３０歳くらいの女が、脚を組んで座っていた。
「これは失礼。驚かれたであろう？」
「…今のは？」
「邪悪な力を跳ね返す結界です。そなたはまだ光の使徒となって間もない。それを忘れていました」
「そ、それでは…」
「そなたの聞きたいことは、分かっています。なぜ私みずからミウを殺さないのか、と」
「…」
「戦えば、あるいはミウを倒すことは可能かもしれない。しかし、

この私も死にましょう。そうなれば、この里は滅んでしまう」
「そんな…」
「残念ですが、私の後継者たる資質をそなえたものは、まだいない。あのシンでさえ…」
「…」
「夢見の石を持っていますね。せめて、私にできることを…」
イサは夢見の石を、ポケットから取り出した。

第二章　ウバメの里　（4）

大師キクミは、イサの手から夢見の石を取ると、両手で包み込んだ。
すると、石が輝きはじめた。
以前、イサが使った時のような、淡い光ではなかった。
眼をつらぬくような、まぶしく、燦然とした輝きだった。そしてそれは、どんどん強くなり、光のために何も見えないほどになった。
イサは眼をぎゅっと閉じたが、それでも、全身が光の中に溶けるようだった。
（な、なんという…）
しばらくすると、光は徐々に弱まり、イサはおそるおそる眼を開けた。
すると、床に、全裸の少女が横たわっているのに気づいた。
「か…香津美！」イサは駆け寄った。
「香津美！　父さんだぞ、香津美！」
香津美は意識がないようだったが、生きているのはわかった。
キリンは驚きを隠せないようすで、
「まさか…ミウの結界を破って…？　大師さま、ご無理をなさっては…！」
キクミは全身、汗にまみれていたが、
「イサよ…そなたの娘ですね？」
「は…はい…はい！」
「私にできることは、これくらいが精一杯…キリンよ、その娘の体を調べて。そして服を」
「はい」
キリンが、ぐったりしている香津美を抱きかかえ、奥の部屋へ入っていった。
イサはその場に土下座して、

「何と…何とお礼を申し上げれば良いかわかりません。何でもいたします！」
「この石の持てる力を引き出せるよう、修練を積むのです。光の始祖とも呼ばれるウバメ様の御力を借りれば、ミウを倒すことはたやすいでしょう」
「私のような者に、出来るでしょうか…？」
「それはあなた次第です。イサよ、そなたの娘のことは私に任せて。ここにいる限り、安全です」
「は、はい！」
「もう日も暮れたようです。シンが村の入口にいるはず。今夜はもう休むとよい」

シンはイサがやって来るのを見ると、入口の門を閉めた。
「お嬢さんが無事戻ったらしいな」
「ああ…君にも、お礼を言わなければ」
イサは、夢見の石をじっと眺めた。
「これは…凄まじいものだな」
「始祖ウバメの魂がその中で眠っている、といわれる。それで夢見の石と言うんだ」
「シン、君はなぜ、これを私に…」
「実は父の片身でね。ミウも欲しがっている」
「ええっ？」
「代々、導師の最高位にある、ウバイとなる修練を積むものに引き継がれる」
「それを、なぜ私に？」
「困っている者を、放っておけないタチでね…まあ、ぼくは力を追求することは、やめたんだ」
「私に、ウバイになれと…？」
「それは君次第だ。とりあえずミウを倒すまでは、役に立つだろう」

「…」
「さて…この里にも酒があってね。君の口に合うかわからんが、ぼくの家に来るか？」
「ありがたい」
二人はその一夜を語り明かした。

第二章　外界（1）

「あたし、ミウちゃんとお風呂に入ってたんだよ」
香津美は言った。
「ミウちゃんはすごく綺麗で、スタイルも良くて…それに、すごく優しいの」
「そうか…」
イサとシンは視線を交わしあった。
（早く大師様に助けていただいて良かった。まだ邪悪なる技は仕込まれておらぬようだ。ミウは激怒しているだろうな）
シンがささやいた。
キリンが香津美に向かって、
「しばらくの間、ここでみんなと一緒に暮らすんだよ。大師さまの小屋へ行くときにはどうするか、覚えたね？　必ずさっき教えてあげた名前を言うこと。わかった？」
「うん、光の使徒ユリです、って言うんでしょ？」

イサ、シン、キリンの3人が、外界（もとの世界）へ行くことになった。
キリンにとっては初めての経験らしい。
「自動車に乗るの、あたし初めてなんだ」
3人は車に乗り込んだ。
「では、外界へ行こう」
シンが手をかざすと、ウバメの里の家も、村人たちも消え失せ、そこは海岸ぞいを走る国道に過ぎなかった。
「あれっ？　いなくなっちゃったよ、みんな」
「外界へ来たのさ」シンが言った。
「ふーん…ウバメの里と、そんなに違わないね」
「ここは田舎だからな。イサ、ここからは、前に来たときと同じ

道順だ」
「それはいいが…ウバメの里とは…」
「君たちのいうパラレルワールドだ。導師と認められた者は2つの世界を自由に行き来できる。自動車ごと移動させられるのは、いまのところ、ぼくだけだが」
「ここにミウがいるの？　さっそく探そうよ」
キリンが言った。シンはなだめるように、
「まあ待て。外界はウバメよりずっと広い。それに、おそらくミウの方から出向いてくるだろう」
3人を乗せた車は、長部（イサ）の家へと向かった。

「大師さま。光の使徒ユリです」
「お入り…」
ユリは、大師キクミの小屋へと入った。
キクミは険しい顔をしていた。
突然、ユリの口元が歪み、眼には邪悪なる光が宿った。
「来るのはわかっていました…ミウよ」
「さすがは大師。すべてお見通しというわけだな」
「ここは邪悪なるものをはね返してしまう結界の中…」
「そうだ。しかし無垢なる少女の心の内に潜んでいれば、入るのはたやすい」
「お前の考えそうなこと」
「敵の前にまず味方から騙したわけか。わたしの正体を知りながら」
「これは私の招いたこと…私の命をかけて、お前を止めなければ」
「ふふ…では始めるか…わが母よ！」
ミウの指から、雷のような光がほとばしった。
キクミは座ったまま右手をかざし、受け止めた。
「なんと…この光の矢は、ウバメの里を吹き飛ばすほどの威力がある。死ぬ気か、わが母よ」

「お前と、ウバイを悪の道に招いたのは…他でもないこの私…」
「そうだ、そして、この素晴らしい力を授かった」
「いずれお前も、ウバイと同じ運命…ならば、この母の手にて…」
「むっ？」
「その少女の肉体は、返してもらおう」
「な…なんだ、力が吸い取られる…力が！」
「抵抗しても無駄です、ミウ…」
「く、くそ！　まさかこんな…」
ユリの肉体が、ドサリと倒れ、乗り移っていたミウの本体が、キクミの中に取り込まれた。
（シン、イサ、キリン…あとは頼みましたよ）
キクミは、自分の胸に短剣を突き刺した。

第二章　外界（2）

シンは車の中で、心の中に雷撃が走るのを感じた。
「思い出した…」
イサはいぶかった。
「どうした？　シン」
「いま、突然思い出したのだ。わが母の名前を…！」
「そうか、何という名前だ？」
「キクミ…大師キクミこそわが母だったのだ！」
「ええっ！」
キリンは驚きの声を発した。
「ウバメの里で何かがあったのだ。イサ、夢見の石を貸してくれ」
「待て…車をとめるぞ」
イサは車を左に寄せ、夢見の石をシンに手渡した。
シンは、夢見の石を両手に包み込んだ…

「大師さま！」

空中に映像が浮かび上がり、キリンは思わず叫んでいた。
キクミが、座ったまま、短剣を胸に突き刺している。
「これは…誰にやられた？」イサが言った。
シンは、
「いや…大師はみずから自分の胸を貫いたのだ」
「どうしよう…大師さまが死んじゃったら…」
キリンは涙声になっていた。
「亡くなられてはおらぬ。あれは封魔の短剣…邪悪なるものを、御身の中に封じ込めたのだ」
「ミウか！？」
「そうに違いないが…俺の妹としてのミウはすでに死んだ。邪悪

な力に、心も、人格も食い荒らされて、すさまじい破壊衝動と、憎悪だけが残った。あの短剣を引き抜けば、それは滝のようにあふれ、ウバメの里は消え失せるだろう」
「なんとかならないの、シン！」キリンが言った。
「この外界にとどまっている導師と連絡を取ろう。特に、導師ウベと…」
「導師ウベ？！　ま、まさか…」
「この邪悪な力に対抗するには、彼の力を借りるよりほかはない。あれこそは、わが父ウバイを破滅に陥れたものだ」
イサが尋ねた。
「導師ウベ？　誰だ、それは」
「この世界では、『超真会』の教祖だ。俺と似たようなものだが…」
「あのカルト集団の？　そのようなやつが…」
「俺とて関わりたくないが、あの力の源である、魔界ナルバに出入りできるのは、やつだけだ」
「確か、この世界では刑務所にいるはずだ」
「ああ、やつの力をもってすれば、刑務所など虫かごのようなものだが…なんとか説得せねば」
「とりあえず私の家へ！」
イサは車を急がせた。

H刑務所、独居房にて…
（来るか…シン）
宇部憲一は、この世ならざるものの到来を、すでに感じ取っていた。
（俺はウバメの里を追放された身。ちょうどよい、ここの暮らしも飽きてきた）
鉄格子のむこうで、何も知らない看守が、スキを見せまいと、監視を続けている。

（まずはお手並み拝見といくか…）
宇部は不気味に笑った。

第三章　導師ウベ　（1）

「香津美…！」
長部(イサ)が家に戻ると、香津美(ユリ)が戻ってきていた。
「よかった…」
「大師さまが…この世界へ送ってくださったんだよ」キリンが言った。
とにかく、これで憂いごとが一つ減ったことになる。香津美の記憶は、あやふやだった。
シンが言った。
「とりあえずは、食事だ。そして休息が必要だ。これから、いろいろと大変だからな」
イサは、
「それは私がなんとかしよう。この家を拠点にして、作戦を練るんだ」

「ウバメという名前に近いほど、その導師の力は強力とされる。俺の父はウバイという最高位の称号を得た。これから我々が接触を試みるウベは、その次に強いということになる」
「ウバメの里を追われたというが…」イサが尋ねた。
「俺の父とで、わが母キクミを取り合った仲だ」
「なんだと？！」
「ウバメに争い事を持ち込んだ数少ない者だ。その源が、魔界ナルバと呼ばれる世界だ」
「ちょっと待て…今思い出したのだが、ミウも名前がウバメと1文字一致している。それが、シン、君の妹だというが…」
「だから、俺よりも強いのだ。母の名を思い出してから、いろいろとわかったことがある」
「どういうことだ？」

「初めは、ミウが父の血を濃く受け継いでいるものと思っていた」
「…」
「実は、そうではなかった。ミウの父は、おそらくウベだ」
「えええっ？！」横で聞いていたキリンが嬌声をあげた。
「わが母キクミは、ウバイとの間に俺をもうけ、そしてウベとの間にも子供をもうけた。それがミウだ」
「まさか…そんなことが…」
「ウバメの里では許されぬ罪だ。ウベは強引に母を身ごもらせたのかもしれぬが…」
「許せない…！」キリンは若い怒りに身を震わせた。
「そのような男だが、今回は味方につけねばならん」
「…きっと大師キクミは、そのことで自分を責めたのだろう。だから、君の記憶を封じた」
「ますます許せないわ！　ウベってやつ！」
「ウベにしてみれば、厄介事を全部押し付けられた、という恨みがあろう。どうやって説得するか…」
しばしの沈黙の後、イサが言った。
「私に…やらせてみてくれないか」

「３５７号。面会だ」
宇部はいぶかった。
（誰だ？）
面会室へと行くと、分厚いガラスのむこうに、見知らぬ中年の男がいる。
「お前は…俺に何の用だ」
「私は光の使徒。こちらでの名前は長部という。導師ウベどの」
「なに…？」
ウベの口が歪み、悪意に満ちた光が瞳に宿った。

第三章　導師ウベ　（2）

「俺の正体を知っていながら、一人でのこのこやって来るとは。お前、死ぬ気か」

導師ウベは威嚇するように言った。

イサは平静を装っていたが、脚の震えを止められなかった。かつては、どんな凶悪犯とも対等に渡り合ってきたが、今眼の前にいるのは、まったく次元の違う怪物なのだ。

「あなたの娘ミウが、邪悪な力に目覚めた」

（なに…こいつ、俺とミウのことまで知っているとは）

ウベはやや警戒し始めた。

「…誰の差し金だ？」

「いま、ウバメの里はたいへんなことになっている」

「ほう…？」

ウベはあごひげを撫で始めた。どうやら興味を示し始めたようだ。

「お前の仲間になれというか…この俺に？」

「私だけではない。導師シンと、キリンがいる」

「シン…あの小僧が、いまや導師か」

「彼の記憶は解き放たれた。あなたを味方につけなければならない理由がある」

「…聞かせてもらおうか」

イサは、邪悪な力が大師キクミの中に封印されていることを話した。

「ウバメの里が滅べば、光の使徒はすべて死に絶えるのだろう」

「…」

「どうするかね」

「このまま、何もしなければ？」

「何も変わらない」

「それでいいではないか？」

「あなたは魔界ナルバの力を操れると聞いた」
「そんなことまで知っておったか」
「あなたなら、あの力をコントロールできる。より強大になれるぞ。大師となることも可能かもしれない」
「…」
「封魔の剣の力も限界がある。いずれあの力は漏れ出すだろう」
「ふうむ…」
粗暴な男だが、馬鹿ではない。イサはシンからそう聞いていた。
「俺は大師の地位などに興味はないが…」
ウベは言った。
「お前たちの話を、もっとよく聞いてみたい」
「それは、ありがたい」
「しかし、今はここで囚われの身だが…」
「シンが言っていた。あなたなら、刑務所など破壊してしまえると」
「まあ、そうだが…この世界であまり事を荒立てたくないのでな」
「これがある」
イサは夢見の石を取り出し、ウベに見せた。
ウベの顔にはじめて驚愕の色が浮かんだ。
「これは…一体なぜ、お前がこれを持っている？」
「私には過ぎた代物だよ」
「よし、これさえあれば…」
ウベは顔の前に手をかざした。
夢見の石は、まぶしい光を放ち始めた。
「３５７号！」
刑務官が驚き、走りよってきた。
「世話になったな」
ウベとイサは、その場から消え失せた。

第三章　導師ウベ　（3）

気がつくと、見覚えのある浜辺にいた。
「ここは…」
すぐ近くに、導師ウベが立っている。
「着いたようだな」
「ウベ、ここはウバメの里ではないか」
「そうだ」
「シンたちは外界、私の世界にいる。ここへ来る意味はない」
「まあ、慌てるな」
ウベは大きな体を揺らしながら、村のほうへ歩いていく。
（まさか…！）
「ま、待ってくれ！　ウベ！」
イサがウベの肩に手をかけると、ウベはまるで紙のように弾きとばした。
イサは砂の上に倒れ、とんでもない過ちを犯したのかもしれない、と気づいた。
「触るな、下郎が」
（夢見の石が…）
イサは倒れたまま、ポケットを探った。
ウベはあざ笑うように、
「お前ごときの者の言うなりになると思ったか」
そして、村の中央へとあるいていく。
（あそこは、大師キクミの…！）
「大師の力は、封魔の剣にすべて注がれている。ゆえに結界も消えているはず」
「きさま！　そのことを知りながら…」
「わざわざ教えにきたのは、お前ではないか。そう…俺はもっと強大になる。魔王ナルバよりもな」

ウベは大師の小屋へ入っていった。
イサはようやくのことで立ち上がると、ウベに追いすがった。
胸に封魔の剣を突き刺したまま、眼を閉じている大師キクミが横たわっていた。
「ようし、剣をこの俺が引き抜いてやろう。そしてキクミよ、お前はまた、おれの妻となるのだ」
ウベは、封魔の剣を一気に引き抜いた。
すると、どす黒い泥のようなものが、キクミの胸から溢れ出し、小屋の床を覆い尽くした。
「むっ？　これは…」
そして、次の瞬間、紫色の炎が巻き起こった。
「ぎゃああ！！」
ウベの体に炎が燃え移り、ぶすぶすと音をたてながら焼かれていった。
「こ…これはいったい…」
やがてウベは炎に飲み込まれ、骨まで焼き尽くされた。
「た、助けてくれ！」
ウベは最後に叫び、そして消え失せた。

「大師さま！」
イサはキクミを抱き起こした。
キクミは、ゆっくりと眼を開いた。
「あなたは…」
「イサです。憶えておられますか」
「ええ…もちろん」
「なにが起こったのか、わかりません。しかし邪悪なるものは去ったようです」
「…」
「いったいなにが…」

「ミウとウベが魂を奪われた、あの力は、魔王ナルバのもの」
「…」
「あの親子はナルバの怒りを買ったのです。そして焼き尽くされた…哀れな…」
「それでは、もう…」
「ウバメの里の危機は去りました。イサよ、よくやってくれましたね…」
キクミは微笑んだ。

エピローグ

邪悪なる力は、導師ウベとともに、本来の持ち主のもとへ還った…

ウバメの里では、祝いの宴がひらかれ、程なくして外界より戻ってきたシン、キリン、ユリも、喜びを分かち合った。

これで、ウベメの里は本来の平穏さを保つことができる。

イサは、シンに尋ねた。

「ひとつ気になることがあるのだが…」

「なんだ、言ってみろ」

「ウベの言っていた、魔王ナルバとは…」

シンは両手を振って、酔眼でイサをにらみ、

「いまは祝いのとき。禍々しい名を口にするな」

「しかし、ウバメにとって脅威ではないのか」

「大丈夫だ。なあ、母上！」

キクミは笑みを浮かべて、

「ナルバは魔界以外の世界に興味はないはず。あちらと、私たちの世界とでは、何から何まで違うのですよ。こちらから近づかない限り、危険はありません」

「そうとも！　さあ、もっと飲もう！」

村人は一斉に杯を挙げた。

そして夜も更けた…

キクミ、キリン、ユリの3人は、女同士の会話が弾んでいるようだった。

「そうか…やはり戻るか」

「ああ」

「ユリの将来のことも、あるだろうしな…引き止めまい」
シンはやや寂しそうではあったが、
「しかしイサよ、俺が自由に外界へ行けることは変わらない」
「もちろんだ」
「イヤだと言っても、押しかけてゆくぞ、よいな？」
ウバメの星空に、二人の笑い声が響きわたった。

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8651w/

光の使徒

2011年10月2日15時33分発行